無名の二流テイマーは王都のはずれでのんびり暮らす 3

～でも、国家の要職に就く弟子たちがなぜか頼ってきます～

Ryuuichi Suzuki
鈴木竜一

illust.
Aito

CHARACTERS
主な登場人物

クロス
お調子者のリザードマン。
バーツと契約する魔獣の一体。

バーツ
しがない
三流冒険者のテイマー。
セラノス王国で
新設される国防組織の
幹部「王聖六将」
候補に抜擢される。

クウタ
バーツと再契約することに
なった不死鳥(フェニックス)。

タマ
十数年前、バーツと
ともに旅をしていた
猫型魔獣。

メイ
物静かなバーツの元弟子。
魔法兵団所属の死霊魔術師。

ロザリン
強さを求めて旅をする。
バーツの元弟子の少女。

フィオナ

ノエリー

ミネット

ティオグ

アリアーヌ

シロン
バーツの相棒である白狼(はくろう)。
面倒見が良いタイプ。

第一章　王都での平穏な一日と新たな事件

しがない三流テイマーだった俺――バーツ・フィリオンの冒険者生活は、かつてテイマーとしての心得を教えた弟子の一人、ノエリーと再会したことで大きな変化を遂げた。

八人の弟子の一人である彼女は突然現れると、俺をセラノス王国の新しい防衛組織の幹部――王聖六将の一人として招いてくれた。

王都へ向かった俺を待っていたのは、彼女と同じくテイマーとしての心得を教えていた、かつての弟子たちだった。

国内最大規模の商会のトップとなったミネット、魔法兵団で将来を有望視されているメイ、若手冒険者として期待されるフィオナ、王聖六将発足を提案するほどの文官となったティオグ……みんなとんでもない活躍ぶりで、大国セラノス王国を支える重要人物になっていたのだ！

そんな彼女たちに師匠と呼ばれている俺は、育成者としてとんでもない実力があると噂になり、王都内を歩いていてもやたら注目された。

その後、若手のテイマー志望の騎士たちを指導することになったり、かつて俺と一緒に冒険者をしていたエリザベッタと再会して彼らの指導役を頼んだりと、王都での生活を満喫していた俺。
王聖六将への正式な任命は少し先ということで、まったりと過ごしていたある日、国内のとある雪山で大規模な雪崩が起きたと報告を受ける。
すぐにそこへ向かうと、かつての弟子の一人、アリアーヌと再会を果たした。
やはりテイマーとなっていた彼女と協力して、雪崩を引き起こしていた魔獣を撃退すると、再び王都に戻ってきたのだった。

雪山で起きたアリアーヌの一件は無事に解決し、再び穏やかな日常が戻ってきた。
「うん。今日もいい朝だ」
セラノス王都を流れる運河。
そのほとりにある家の前で体を伸ばしながら深呼吸をすると、少し離れた場所にある中央通りからは商人たちの活気のある声が聞こえてくる。
「朝も早いっていうのに元気だなぁ」
「商売人が項垂れていては売れる物も売れぬからな」
「あぁ、だからミネットの嬢ちゃんはいつも元気なのか」

俺のパートナー魔獣である白狼のシロンとリザードマンのクロスも、賑やかな王都の様子に目を細めていた。
――っと、そういえば最近はメンバーが増えたんだったな。
「確かにミネットさんは元気ですけど、それはまたちょっと違うような……」
「あまり深く考えない方がいいぞ、クウタ」
俺の肩にとまる鳥型魔獣のクウタと、足元には子猫サイズにまで縮まったタマだ。
どちらも十年以上前に一度パートナーを組んでいた、いわば古参。
最近になって再会してまた契約を結んだのだが……クウタは不死鳥でタマは白虎と、いずれも魔獣ではなく、上位種である神獣へとグレードアップしていた。
おまけにその理由がどちらも、また俺とパートナー契約を結ぶ時のために鍛えていた結果だというのだから驚きだ。
かつての彼らとの契約は、こちらが一方的に打ち切ったようなものだからな。
正直、恨まれていたとしても仕方ないと覚悟はしていたが、まさかそんな風に思ってくれているとはと、嬉しさと同時に申し訳なさが込み上げた。
ともかく、今はこうして元通りの関係に収まったのだからヨシとしよう。
……ただちょっとだけ問題点が。

「さすがに今のままじゃ狭いかなぁ」
最初はシロンとクロスしかいなかったので気にならなかったが、クウタとタマが加わったことで、いよいよ元の住居が限界を迎えようとしていた。
これについては魔獣たちも同意見のようだ。
「そうだぜ、旦那。もっとでっかい家に引っ越そうぜ」
「主がずっと質素倹約の精神を掲げていたのは知っているが、ものには限度がある。散財をするわけではなく、これはあくまでも必要経費だ」
「確かに……住環境は整えておいた方がよさそうですね」
「ましてやご主人は大国セラノスを支える王聖六将の一角。周りからの信用問題に発展するかもしれませんよ」
「うっ……」
クロスにシロン、クウタ、タマと、全員が揃って正論を並べてきた。
これではさすがに言い返せないな。
「みんなの意見も一理ある。何とかできないか、騎士団長のラングトンに相談してみようか」
とりあえず方針は決まったが、今日はその前にやるべき大事な仕事がある。
そいつをこなすため、俺たちは騎士団の演習場へと向かった。

演習場へ到着すると、すでに指導役のノエリーやエリザベッタ、そして教え子である若きテイマー候補たちが揃っていた。
今日は彼らと魔獣の合同鍛錬をする日だったのだ。
鍛錬には俺の相棒であるシロン、クロス、クウタ、タマも加わっている。
タマは今日が若手たちの魔獣と初顔合わせとなるため、最初に自己紹介をした。
それが終わると、一人の青年が俺のもとへやってくる。
「バーツ殿、手合わせをお願いしたいのですが」
「デリックか。いいぞ」
若手テイマーの中でも一番の成長株として期待されているデリック。
彼のパートナー魔獣はAランクのグリフォンで、名前をムーバという。
俺がここへやってきた当初、デリックは実力を疑問視して勝負を挑んできたな。まあ、実績もない採集クエストばかりこなしていた元三流冒険者が指導者になったといきなり聞かされたら、当然の反応とも言える。
パートナー魔獣同士で戦い、勝負の結果はクロスの勝利。
魔獣としてのランクでは大きく劣るクロスが勝利を掴めた最大の要因は、魔獣でありながら魔法

を自在に使いこなすという意外性であった。普通、魔獣は魔法を使えないとされているからな。
しかし、これがいいきっかけとなり、あれからデリックは素直に俺の組んだ鍛錬メニューに取り組むようになった。
今日はその成果を見せたいようだ。
俺としてもそろそろ実戦形式の鍛錬に移ろうかと思っていたので、成長ぶりを確認するいい機会となる。
「相手はもう一度クロスでいくか？」
「いえ、ここは新戦力の白虎（ホワイトタイガー）でお願いしたいです」
デリックからのリクエストは、前回敗れたクロスではなく神獣のタマだった。
「おいおい、神獣相手で大丈夫か？　俺とのリベンジマッチの方がよくないか？」
「こら、野次を飛ばすんじゃない」
シロンにたしなめられるクロスだが、やはり不満そうだった。
一方、指名されたタマは最初こそ少し動揺していたが、同期のクウタから「頑張って」とエールを送られてヤル気になったようだ。
他の若手テイマーたちも、神獣の実力をこの目で見られると興奮気味だった。
それではギャラリーの期待に応えて、神獣・白虎（ホワイトタイガー）の真の姿をお披露目（ひろめ）するか。

「タマ」
「分かっていますよ」
すべてを口にしなくても、タマは俺からの要求を先読みして本来の姿へと戻った。
さっきまでの愛くるしい子猫から、雄々（おお）しい白い虎へと変わったことで、若手テイマーたちからは「おぉ！」と歓声があがる。
「やはり神獣ともなると、普通の魔獣とは何かこう、まとうオーラが違うな」
俺は思わずそうこぼす。
ベテランのテイマーであるエリザベッタも雄々しいタマの姿に感心して、口が半開きになっている。
だが、対戦相手であるデリックはそう暢気（のんき）に構えてはいられないようだ。
「これが神獣……」
表情を引き締め、パートナー魔獣であるグリフォンのムーバに何やら指示を出すデリック。
この辺の切り替えはさすがだな。
「では、今回も私がジャッジをしますね」
「頼むよ、ノエリー」
鋼鉄魔人（アイアン・レイス）のアインを連れたノエリーが、審判として俺とデリックの間に立つ。

「鍛錬の成果を見せてやれ、デリック、ムーバ」
「もちろんですよ」
「キーッ！」
エリザベッタから激励（げきれい）され、デリックとムーバの士気はさらに上昇。
やがて、ノエリーから「はじめ！」の合図が出されて実戦形式の鍛錬が幕を開ける。
さて……お手並み拝見といくか。
「ムーバ！　上昇しろ！」
「キキーッ！」
クロスと戦った時と同じように、デリックは空から攻撃を仕掛けてくるつもりのようだ。
これに関しては定石なので何も間違ってはいない。
勝ったとはいえ、クロスもこの攻撃には苦戦していたからな。
まずはこいつで様子見というのがセオリーだろう。
「タマ、慌てる必要はないぞ。相手の動きをよく見てカウンターだ」
「了解です」
相手がAランク魔獣でも、ポテンシャルではタマの方が上だ。慣れない上空からの攻撃に惑わされず、落ち着いて対処すればこの不利を覆（くつがえ）せる。

「いけぇ！」
デリックの叫びとともにムーバは急降下。
タマ目掛けて真っすぐに落ちてくる。
――速い。
回避はできるかもしれないが、あれだけの速度だとすぐにまた上空へと舞い上がってしまって、カウンターを食らわせるのは困難か。
明らかに、クロスと戦った頃よりも強くなっている。
今のデリックとムーバのコンビが相手なら、クロスが再戦しても前回以上に苦戦しそうだ。
そんな中、タマは落ち着いて相手の攻撃をかわそうとする――が、ムーバのスピードが想定以上だったようでかすり傷を負った。
「大丈夫か、タマ！」
「平気です。少々見誤りました」
無理もないか。
豪雪地帯で暮らしていたタマにとって、魔獣との真剣勝負っていうのは久しぶりだろう。そもそも以前一緒にいた時はまだ子どもだったので、あまり戦闘をさせていなかったからな。
神獣となったからにはそれなりに戦闘経験があるのだろうけど、テイマーと契約をしている魔獣

は、本能のままに向かってくる野良の魔獣とは違って、人間からの指示を受けて行動するのが基本。
これまでのようにいかないのは必然だ。
だが向こうがコンビネーションで来るならば、こちらも負けてはいられないな。
「タマ、おまえが最も得意とする戦い方を見せてやるんだ」
「得意……なるほど」
どうやらこちらの意図を理解してくれたようだな。
最初の攻撃が有効と判断したデリックは、再びムーバへ急降下攻撃を指示。
先ほどと同じ流れでこちらへと向かってくるが――そう何度も同じ手でやられるタマではない。
今度は早いタイミングで攻撃をかわし、反撃に移る。
「いけっ！　タマ！」
「はい！」
俺の狙った通り、タマは自慢の跳躍力を生かして高く跳び上がる。
「何っ⁉」
これにはデリックも予想外だったようだ。
驚くのも無理はないか。
何せ、低空飛行から再び上昇しようとしたムーバよりも、さらに高い位置までジャンプしていた

のだから。
雪崩の多い豪雪地帯で暮らしていたタマにとっては普通の高さだが、周りで見ていた者たちは目を丸くしていた。
タマはそのままムーバの背にのしかかると、地面へと叩きつける。
これはかなりのダメージだったようで、ムーバは完全に戦闘不能に陥った。
「それまで！　バーツ殿の勝利です！」
審判を務めるノエリーが高々と宣言して、実戦形式の鍛錬は終了。
敗れたデリックは起き上がったムーバを気遣いながらも、こちらへ一礼する。
「ありがとうございました、バーツ殿。まだまだ俺たちは未熟です」
「しかし、前回よりも格段によくなっていたぞ。ムーバのスピードは増していたし、君の指示も的確だった。注文を付けるなら、攻撃のバリエーションかな」
「痛感しました。ムーバの最大の強みである頭上からの攻撃……でも、それにこだわってばかりでは逆手に取られてしまうケースも出てくる。そこからの対処法を検討しなければいけませんね」
さすがはデリック。
エリートの血筋だけあって賢いな。
ただ悔しがるだけでなく、次はどう戦ったらよいのかきちんとシミュレートできている。

エリザベッタや仲間たちも彼の成長ぶりを感じ取っているようで、いろいろと声をかけていた。
……なんだか、昔のノエリーたちを思い出すな。
彼女たちは今でこそテイマーとしても知られるほどの実力者になっているが、幼い頃はうまくいかないことばかりで苦労していた。
そこを同じ境遇の仲間たちと支え合って、今日まで成長してきたのだ。
デリックにはさっきも伝えたが、最初の頃に比べると魔獣との信頼関係は深まり、いい連携ができるようになってきている。
ここからさらに練度を上げていけば、戦力として十分計算できるだろう。
実戦形式の鍛錬を志願したのはデリックのみであったが、他の若手たちにも話を聞いてみる。
すると、それぞれが契約するパートナー魔獣の特性を生かした戦い方や、それ以外での活躍の場を想定したプランをしっかりと練られているようだ。
数的には今は戦闘特化型の魔獣が中心となっているが、その種類も増やしていきたいところだ。
戦場では戦う以外にも、いろんな役割を持った兵士が存在している。彼らには魔獣の力で、数段上の役割へと駆け上がってもらいたい。
午後からは自主鍛錬の時間とし、ここからは講師をノエリーにスイッチ。

俺は引っ越し先の物件探しをするために騎士団の詰め所を訪ねてみようと、王都の中央通りへ繰り出した。
するとそこで、意外な人物と出くわす。
「あれ？　メイ？」
「バ、バーツ先生⁉」
セラノス魔法兵団において若きエースと期待されているメイだった。
彼女はノエリーやフィオナたちと同じ教会で育ち、俺がテイマーの心得を教えた八人の弟子の一人でもある。
あの時いた子どもたちの中では一番大人しく、争いごととは無縁の性格をしていた彼女が、今や死霊魔術師として活躍しているというのだから……分からないものだよなぁ、人生って。
「ど、どうしてこちらに？」
「いや、ちょっと騎士団の詰め所に用事があってね。家を紹介してもらおうと思って……君の方はお休みかい？」
「は、はい。でも、どうしてお休みって分かったんですか？」
「君と会う時はいつも魔法兵団の制服を着ていたけど、今日は私服だったからね」
ファッションに関してはかなり疎い方だと自覚しているが、今のメイの落ち着いた色合いをした

服装は彼女の雰囲気にもマッチしていてとてもよく似合っている。
――ということを告げたら、めちゃくちゃ動揺していた。
いかん。
セクハラと捉えられたか？
「す、すまない。気分を害するようなことを言ってしまって」
「とんでもないです！　先生に褒められてとても嬉しいだけですから！」
無理をしてフォローしてくれたのかなと思っていたら、魔獣たちが一様に呆れた顔つきとなっていた。そのおかげで、俺の勘違いであるとすぐに察せられた。
しかし、魔獣である彼らが分かるのに同じ人間である俺がメイの心を理解できていないというのは問題だな。
でも年頃の女の子が考えていることって、いまひとつ読み取れないのも事実だ。
幼い頃ならまだ分かりやすかったのに。
ともかく、せっかくの休日を邪魔してはよくないから退散するとしようか。
「じゃあ、俺たちはそろそろ行くよ」
「あっ」
「うん？」

歩き出した瞬間、メイが何かを言いたげにこちらへ手を伸ばす。
「どうかしたのか？」
「い、いえ、その……わ、私も一緒に行っていいですか？」
「えっ？」
思わぬ提案だった。
「俺は別に構わないが……いいのか？　せっかくの休日を」
「大丈夫です！　むしろ私としてはそっちの方がいろいろと楽しめますから！」
「そ、そうか？」
若い女性がおっさんの住宅事情を知って楽しめるものなのか。
……いや、他人の趣味嗜好にケチをつけるべきではないな。
というわけで、新たにメイを加えたメンツで騎士団の詰め所へと向かう。
門番にアポなしではあるがランゲトンと面会できないか尋ねてみたのだが、ここで思わぬ事態が――
「申し訳ありません、バーツ様。ランゲトン騎士団長は現在外出中でして」
「そうなのか。今どこに？」
「大聖堂にいらっしゃるはずですが……」

それはまた予想外の場所だな。
「騎士団長さんが大聖堂に……変わった組み合わせですね」
こちらの顔を覗き込みながらそう語るメイ。
確かになぁ。
彼とも再会してからしばらく経つけど、そんな信心深いようには見えなかった。
となると、大聖堂で何かトラブルでもあったか？
「……少し様子を見に行ってみるか」
「お付き合いしますよ、先生」
「いいのか？」
「もちろんです。というか、ここで帰ったら気になって、今夜眠れなくなりそうですから」
「ははは。それは言えている」
困りごとならば彼の力になってやりたい。
まだ正式任命前とはいえ、これでも王聖六将の一員。
きっと助けになるはずだ。
俺たちは門番に事情を話してから、大聖堂へと移動する。
王都の真ん中にかかる大きな橋を渡り、緑豊かな自然公園の先に進むと、大きなステンドグラス

が特徴的な建物が現れた。
「あれが大聖堂か……」
想像していたよりずっとデカいな。
近くには俺の家の窓からも見える時計塔もあり、この王都のシンボル的な役割を果たしている。
周りに騎士たちの姿はないが、情報によればここにラングトンがいるはずだ。
ゆっくりと大聖堂へ近づいていく――と、ここでシロンに異変が。
「む？」
急に足を止め、辺りを警戒し出す。
その鼻先はピクピクと小さく動いていた。
「何かあったのか、シロン」
「変な臭いだな……あっちの方から漂ってくる」
「あっち？」
シロンが示した場所は大聖堂のある方向だった。
「大聖堂で異変か？　……誰か死んだりしてたら、洒落（しゃれ）にならないぞ」
たまらず顔が引きつる。
それは他の魔獣たちも同じだった。

「行ってみましょう、バーツさん」
「騎士団長のおっさんの身に何かあったのかもしれねぇぜ」
「もしそうだったら大変ですよ！」
「そうだな。――走るぞ」
メイにクロス、シロンの言葉に、俺も何だか嫌な予感がする。
ラングトン……何事もなければいいのだが。
その場にいた全員が大慌てで駆け出し、大聖堂の前にたどり着くと中では何やら人だかりができていた。
大聖堂の入り口の少し手前で、これ以上中には入らないようにと注意を促しながら、騎士たちがロープで制限をかけているようだ。
俺たちはそんな彼らに近づき、事情を説明してからロープの内側へと入れてもらった。
軽く話を聞いた感じ、どうやら、俺たちが到着する前に大聖堂で何やら事件が起きたらしい。
建物に近づいていくと、メイが異変に気づく。
「せ、先生、あそこを見てください」
「うん？　――ステンドグラスが割れている？」
この大聖堂には、いたるところに綺麗（きれい）なステンドグラスがあった――が、今は跡形もなく粉々に

砕け散っている。
こいつは自然に割れたわけじゃない。
何者かが意図してわざと割ったようだ。
「い、一体何があったんだ？」
周りの忙しなさから只事ではないと感じてはいたが、どうも俺たちの想像以上の事態が発生したようだ。
大聖堂の中に入ると、こちらに気づいた騎士の一人が、ラングトンの居場所を教えてくれた。
「バーツ様、ラングトン騎士団長でしたら奥です」
「ああ、ありがとう」
……なんか、未だに「様」をつけられる呼び方に慣れないな。
そもそもみんなの「師匠」とか「先生」もまだちょっとむず痒いんだよねぇ。
冒険者時代は採集クエストしかやらなかったので、どちらかというと下に見られることの方が多かったからなのか……まあ、徐々に慣れていこう。
それはともかく、今はこの大聖堂に起きた事態を把握しなければ。
大聖堂のさらに奥へ足を運ぶと、俺たちは言葉を失った。
「ど、どうなっているんだ、これは……」

驚くべきことに、中はほとんど廃墟だった。
まるで嵐でも通過した後のような荒れっぷりに、俺だけじゃなく他のみんなも茫然と立ち尽くしている。
そんな俺たちのもとへ、ラングトンがやってきた。
「おや？　早い到着だな。外ではもうそんな騒ぎになっているのか」
「と、到着？」
「うん？　いや、今回の事件について君の見解を聞きたいと使者を送ったのだが……その様子だと入れ違いになったようだな」
俺の意見？
参考になるかは分からないが、まずは詳しい状況を聞いてみるか。
「ラングトン騎士団長、これは一体……」
「見ての通り……派手に暴れ回っていたヤツがいてな」
「犯人は逃走中なのですか？」
「心配無用。すでに捕らえて連行している。錯乱状態でまともに会話ができないが……」
いったいどうやったらこんなことになるのか。
それと、動機も気になる。

なぜこのような暴挙に出たのか。
大聖堂に恨みがあるとしか思えないが、ここは特に悪評など聞いていない。
それに、捕まえた犯人が錯乱状態だったというのも気にかかる。
もしかして、シロンの感じた異臭と何か関係があるのかもしれないな。
それをラングトン騎士団長へ伝えると――
「バーツ……悪いが、もう少し詳しい話を聞かせてくれるか？」
眼光がさらに鋭くなった。

場所を騎士団長の執務室へと移し、何が起きたのか改めて説明を受けることとなった。
王都の大聖堂をめちゃくちゃにした犯人――それはよくよく聞けば、ごく普通の一般人であり、俺も面識がある人物だった。
彼とは王都の酒場で何度か一緒に話したことがあった。
とはいえ、特別親しくしている間柄ではなく、王都で配達の仕事をしている若い兄ちゃんだ。
彼のことを詳しく知っているわけじゃないが、少なくとも神聖な大聖堂をめちゃくちゃにするほど暴れるようなやんちゃではないはずだ。
ラングトン騎士団長も、彼とは個人的な交流があるようで、とてもそのような事件を起こすような青年ではないと断言した。
彼が気にかけていたのは事件を起こした時の青年の精神状態であった。
「大聖堂の関係者が言うには、突然フラッと現れ、手にしていたハンマーで辺りを破壊し始めたらしい。とても手が付けられる状態ではなく、仕方なく騎士団に要請をしたとのことだ」
「一体何があったんだ……」
フラストレーションが溜まって大暴れをした……ってわけじゃなさそうだな。
もちろん、彼のプライベートをくまなく調べたわけじゃないのでハッキリとは言い切れないのだが、ストレス解消にしてはあまりにも脈絡がなさすぎる。
どういう思考をしたら、ハンマー片手に大聖堂で暴れてやろうって気になるのか。
俺が悩んでいると、ラングドンが口を開く。
「恐らくだが……彼は正気を失っていた可能性がある。原因については現在調査中だが、君たちが来るまで現場にいたミネットが、興味深いことを話していたな」
「ミネットが？」
なぜ彼女が？　と思ったが……彼女は国内最大級の商会を束ねる、トップクラスの商人だ。
ゆえに、かなりの情報網を抱えているはず。
そうなると、セラノス王国としては頼りになる情報源になるだろう。

そんなミネットからもたらされた情報とは、どんなものだろうか。
「あれと似たような事件が、王都だけじゃなく近隣の都市でも発生しているようだ。しかも、隣国ではまったく報告がなく、セラノス王国内のみで起きていると。彼女と親交のある商人たちが言うには、さまざまな専門家たちが集まって原因究明に奔走しているらしいが、未だにハッキリとしたことは分からないという」
「えっ？」
かなり特異な事態だと思うのだが、どうも類似性のある事件が近場で起きているらしい。
しかも他国では報告例がないという情報も引っかかる。
どうしてセラノス国内でのみ、そんな事件が起こっているんだ？
「魔法絡みの可能性は？」
「大聖堂関係者の話では、青年のものとは異なる魔力を感知したそうだ。いわゆる精神操作系の魔法が使用されたと疑われているが、かなり微量だったらしく、断定するには弱いって話だ」
「なるほど……」
そもそも、精神操作系は禁忌魔法として扱われており、世界的に使用が禁じられている。
おまけに高難度であるため、魔法使いとしてかなりの腕前を持っていなければ使うことすら叶わないのだ。

「……それと別件ではあるのだが、もうひとつ、君の耳に入れておかなくてはならない情報がある」
「どんな情報なんだ？」
「まもなく、新たな王聖八将の候補者がセラノス王都へ到着する」
「っ!?」
新たな王聖八将候補。
現段階では俺の他だと一流冒険者パーティーのリーダーであるニーナ、傭兵派遣商会代表のトラビス、そして俺の元弟子アリアーヌの四人は把握している。
残り二人となった候補者のうちの一人が間もなく姿を現すのか。
たしか残りの二人も、俺の元弟子って話だったけど……
「最後の一人は合流までにもう少し時間がかかるようなので、近々五人の顔合わせが行われる予定だ」
「いよいよそこまで来たか……」
「うむ。これが実現するまでに無用なトラブルは避けたいところではあるが……いつどこで、今日と同じような事件が起こるか分からんからな」
「放置しておくわけにはいかない案件か……」

組織としての転換期に、狙いすましたかのような大事件の予兆。
こいつは気合を入れて対応していかなくちゃならないな。
「ところで話は変わるが、随分と到着が早かったが……ひょっとして俺に何か用事でもあったのか？」
「あっ、そうだった」
衝撃的な事件が発生していたので、すっかり忘れてしまっていた。
住環境の改善を目指しており、何かいい物件を教えてほしかったということを、ラングトンに伝える。
すると、どうも彼自身はその手の情報を持っていないようだったが、ある人物に話を持っていったらどうかと教えてくれる。
その人物とは――
「ミネットならば、いい物件を知っているはずだ」
「そ、そうなのか？」
「王都内の土地関係は、すべて彼女の商会が管理しているからな」
「す、凄いな」
名のある商会とは聞いていたが、まさか国から土地管理を任されるほどだったとは。

今回の事件に関する情報も含めて、一度会ってみようか。
あ、でもメイはどうするんだろうか。
「メイ、俺たちはこれからミネットの商会を訪ねるつもりだが」
「私も行きます」
即答だった。
「しかし、帰りは遅くなるかも――」
「でしたら、夕食は私が腕によりをかけた手料理をご馳走します！」
ずいっと前のめりで熱く語るメイ。
ふむ……メイの手料理か。
どんな味か気になるな。
子どもの頃から家事能力はずば抜けて高かったし、期待が持てる。
「じゃあ、お願いしようかな」
「はい！　お任せください！」
「……なあ、シロン。俺たちはこれからミネットお嬢ちゃんの商会に行くんだよな？」
「そうだが」
「どうなると思う？」

「分かりきったオチを聞くものではないぞ、クロス」
「そうだよ。そういうのを野暮(やぼ)って言うんだから。ねぇ、タマ」
「いや、何か違う気がするけど……」
「何を話しているんだ、みんな」
コソコソと話し込んでいる魔獣たちを呼び寄せて、ミネットの商会へ向けて出発した。

店に入ると、ちょうどミネットが商談を終えたばかりらしく、俺たちを発見するとすぐさまやってくる。
「やあ、ミネット」
「こんにちは、バーツ先生――って、あら。今日は珍(めずら)しい方と一緒ですのね」
「お休みだったので一緒に王都を散策していました」
「ふーん……」
おや？
なんだかミネットの様子がおかしい？
ちょっと不機嫌になったような？
「あ、あの、ミネット？」

「っ！　し、失礼しました。それで本日はどのようなご用件ですの？」
ミネットはハッとなって、いつもの調子へと戻る。
気を取り直し、俺は住居について抱えている悩みを話した。
「――なるほど……確かに、あの家に全員で寝泊まりは限界がありますわね」
「家賃が格安の借家とかないかな？」
そう言うと、ミネットとメイの二人はキョトンとした表情に。
「えっ？　俺なんか変なこと言った？」
「い、いえ、その、先生ほどの立場の方であれば、借家と言わず、一軒家を新しく建てられてはいかがでしょう」
「わたくしもメイさんと同じ意見ですわ。先生と同じ王聖六将候補になっているニーナさんやトラビスさんは、すでに土地を決めて住居の建設に取りかかっているようですし」
「えっ？　そうなのか？」
あの二人はさすがにしっかりしているな。
それに資金も豊富にあるだろうから決断も早い。
「ちなみに一軒家となれば……こちらがオススメですわ」
「どれどれ」

ミネットが受付にある机の引き出しから持ってきた二枚の紙を、俺に手渡す。
一枚は物件の立地や内装などが詳しく記載されており、もう一枚は見積書のようだ。
「二階建てで地下室あり。おまけに立派な裏庭まであるのか」
条件はとてもいい――が、問題は価格だ。
続いて見積書にも目を通してみる。
「うん？　随分と格安だな……」
ひょっとして曰く付きの家なのか？
「なあ、ミネット、この家はどうして売りに出されているんだ？」
「とある資産家が暮らしておりましたが、二年ほど前に亡くなってからずっと空き家となっていましたの。家具などは撤去してしまいましたので、揃えなくてはなりませんが」
けど、それだけの理由でここまで安くはならないはず。
まだ何かありそうだな。
「本当にこれが相場の値段なのか？」
「もちろん、これはバーツ先生だけの特別価格ですわよ。――ただ、少しこなしていただきたいお仕事がございます」
「っ！　なるほどね。さすがは商売上手だ」

最初から俺に何かを依頼するつもりだったか。
まあ、その依頼内容とやらも大方見当はつくけど。
「昼間に大聖堂で起きた事件について、だろ？」
「さすがはバーツ先生。そこまで読んでおられたのですね」
「何か頼むつもりってのは分かってたよ……とはいえ、まさかここでその話が出てくるとは思ってもみなかったけど」
「この国の未来に大きな影響を与えるかもしれない事件ですもの……騎士団からの報酬以外に、わたくしからも何か先生のお力になれれば、と」
口ぶりからして、ミネットはいずれ俺が物件を求めて商会を訪ねてくると予想していたようだな。
――で、格安の良物件を紹介しようにも、俺の性格上、何もせずにそれを受け入れるとは思っていない。
だから、騎士団からの要請を受けて動き出した今を絶好のタイミングと見計らって、この話を持ってきてくれたってわけか。
そんなミネットに、メイがジト目を向ける。
「相変わらず回りくどいことをしますね、ミネットさんは」
「そこはぜひ商売上手と言ってもらいたいですわね、メイさん」

うーん……この二人って実は仲が悪い？
いや、それはないだろうな。
教会にいた頃から仲良かったし、以前フィオナも、ミネットとメイはよく二人で買い物に出かけると話していた。
まあ、その件は一旦置いておくとして。
「じゃあ、詳しい話を聞かせてくれ」
「分かりました。ではどうぞこちらに」
俺とメイはミネットの案内で商会の奥にある応接室へと案内され、本題へと移る。
「わたくしたちの商会は以前から、大聖堂で起きたことと類似した事件を各地で耳にしてきました」
「らしいな。ラングトンから教えてもらったよ」
「騎士団長さんには以前から相談をしていたのですが、明確な原因などが判明していないので対応できず……ついに王都でも事件が起きてしまったのです」
「そうだったのか」
この若さで、今やセラノス王都を牛耳る大商会を育て上げたミネットでさえ手を焼く案件とはな。
ラングトンから聞いていた話から危惧はしていたが……こいつはやはり一筋縄ではいきそうにない。
「ミネット、君が知っている情報を教えてくれ。こちらでも何かやれることはないか探ってみる」
「分かりました。――では、バーツ先生は冒険者時代にレドルという町を訪れたことはありますか？」
「レドル……？」
行ったことはないものの名前くらいは知っている――が、お世辞にもいい噂は聞かない町だ。
理由は治安が悪い。
シンプルだが、これに勝るものはないだろう。
「あそこはかなり印象の悪い町だが……もしかしてセラノス領だったのか？」
「えぇ。実は大聖堂の件と類似した事件が国内でいくつか発生しているのですが、暴れ出した者たちには、全員共通点があったのです」
「……ここ最近になってレドルを訪れているってことか」
「ご名答」
つまり事件解決の鍵が眠っている可能性が高いのか。
「あそこは王都からも遠く離れているのですが、あの町のある一帯を治めている貴族――ダルフォス家に怪しい動きが見られるという情報もあります」

「怪しい動き？」
辺境の領地を治める貴族の怪しい動き、か。
というか、ダルフォス家って聞いたことあるな。
「ダルフォス家……確か、かなり発言力のある貴族だったな」
「えぇ。特に今の当主であるセブロイ様とも仕事で交流があるのですが、人格者として領民からの支持も厚いです。最近はレドルを健全な町にしようと動いているそうですわ」
それでも怪しい噂はあると。
綺麗なことを言っておいて、裏では薄汚いってパターンか。
それが事態をより厄介にしているって感じだな。
王都から離れているとなったら騎士団や魔法兵団の目も届きにくくなるし、悪事を働くにはもってこいの環境だ。
健全な町にしようと言いながら裏で悪事を働いているとすれば、絶対に手放したくない場所と言える。
「あの町を訪れた商人たちから、領主が何やらよからぬ商売に手をつけているという情報がありまして……もちろん、騎士団や魔法兵団にも話を持ちかけましたが、やはり決定的な証拠がないと動けないようです」

相手は貴族だからなぁ。
おまけに、ダルフォス家って王家とも親交の深い貴族だったよな。
本来なら辺境領地を治めるような家柄じゃないのに、自ら率先して「辺境開拓をする」という名目で移住したと聞いている。貴族の中ではなかなか見かけない領民思いのダルフォス家を尊敬している人も、たくさんいるって話だ。
そんな絵に描いたような模範的領主に降って湧いた疑惑。
調べたいが、貴族としての発言力を考えると、国の組織である騎士団や魔法兵団は迂闊に動けない。つまり、ノエリーやメイには頼れないと同義。
となると、俺に出番がやってくるってわけか。
「分かったよ、ミネット。レドルの町へ行って、何が起きているのか詳しく調査してみよう」
「ありがとうございます。バーツ先生ならきっとそう言ってくださると思っていましたわ」
深々と頭を下げるミネットの表情は、どこか安堵したようにも映った。
すると、ここまで静観していたメイが唐突に口を開く。
「では私も同行します」
「「えっ？」」
メイからの提案に思わず俺とミネットの声が重なった。

「あなた……わたくしの話を聞いていませんでしたの？　魔法兵団は確たる証拠がなければ動けませんのよ？」
「つまり魔法兵団として動かなければいいのですよね？」
「それは屁理屈ですわ！」
珍しく声を荒らげるミネットをなだめつつ、俺はメイへ尋ねる。
「君の気持ちはありがたいが、魔法兵団に所属する魔法使いである以上は、迂闊な行動を控えるべきだと思う」
「でも……私も先生のお役に立ちたいんです」
「お役にって……」
「ノエリーさんやフィオナさんたちが続々と先生と一緒に成果を上げているのに、私はまだ一緒に外出したことさえないなんて……」
言われてみればそうかもしれないが、外へ出ていないと言うならティオグも同じなんだけどな。
「そんな子どもじみた理由で……はあ」
少し呆れたように言ってから、ミネットは語り始める。
「そういえば、前にレドルへ向かった商人の一人が、現場へ忘れ物をしてきたという報告を受けておりましたわ。本来であれば本人が取りに行くべきなのでしょうけど、あそこは治安が悪くて迂闊

には近づけない。誰か腕の立つテイマーか魔法使いでも頼むしかなさそうですわね」
「っ！　な、なら、私が！」
「あら、メイさんが引き受けてくれますの？」
……ミネットめ。
だいぶわざとらしいぞ？
まあ、本人は狙ってやっているのかもしれないが。
「こちらの要請でレドルに向かうのですから、その先で偶然誰かと出くわして合同調査になるなんて流れもあり得ますわね」
チラッとこちらへ目配せをするミネット。
連れていけってことなんだろうけど……本音を言わせてもらえば助かる。
あそこは本当におっかない町らしいからな。
噂が独り歩きしただけで実はたいしたことないってオチかもしれないが、魔法使いであり高ランクの魔獣である亡霊竜（ファントムドラゴン）をパートナーとするメイがいてくれたら心強いよ。
そういったわけで、今回はメイと一緒に行動することとなった。
「じゃあ、早速レドルへ向かう準備を進めるよ」
「こちらでも馬車の手配など可能な限りのお手伝いは致しますわ」

「ありがとう。助かるよ、ミネット」
こうして、俺たちは大聖堂で起きた事件の真相を確かめるため、三日後に治安最悪と悪名高いレドルの町を目指すことに決まった。

商会から家に戻り、メイの手作りディナーをいただこうとする――が、何やら家の前に人影があった。
「あれは……」
遠目では騎士団関係者なのかと思ったが、どうも違ったようだ。
「お久しぶりです、バーツさん」
家の前で俺たちの帰りを待っていたのは、大陸でもトップの実績を誇る傭兵派遣商会の代表にして王聖六将の候補者でもあるトラビス。そして彼の秘書のエリカだった。
「トラビス？　どうしてここに？」
「王聖六将にかかわる知らせを耳にしたので、あなたには僕が伝えに来たんです」
「君が自ら？」
「はい。新しく増えたというパートナー魔獣も一度見ておきたかったですし」
凄腕の兵士たちを抱えているらしいが、トラビス自身はまだあどけなさの残る少年。しかし、一

代で業界ナンバーワンの地位まで上り詰めた父親の商才をしっかりと受け継いでいると評判だ。
「それで、その情報というのは？」
「実は――新しい王聖六将の一人が王都に到着されたそうです」
「っ⁉　ほ、本当か⁉」
現在まで分かっている王聖六将は四人。
俺とニーナとアリアーヌ、そしてトラビス。
そこへ加わる五人目がついに王都へやってきたのか。
前にアリアーヌは、俺がまだ再会を果たしていない二人の元弟子が王聖六将になったと言っていたけど……
今回来たのはどっちだろうか。
めちゃくちゃ気になってきたな。
さらにトラビスからの情報は続く。
「最後の一人についてはまだ王都へ到着する目途が立っていないそうなので、それ以外の候補者たちで、明日の朝早くからお城へと集まり、顔合わせをするそうですよ」
「顔合わせ、か」
俺としても、早く顔を合わせたいから助かる。

すると、トラビスがちらりとメイに目を向けた。
「ところで、そちらの女性は？」
「あっ、私はバーツ先生の元弟子でメイと言います」
「メイさん？　もしかして死霊魔術師の？」
「ご、ご存知なのですか？」
相手はまだ子どもだが、俺と同じ王聖六将の候補者であるというのは知っているらしく、丁寧な口調で尋ねるメイ。
トラビスのことだから、彼女の情報もぬかりなく集めているんだろうな。
「有名ですからね。死霊魔術師として超がつく一流なのに、パートナー魔獣を連れたテイマーでもある……でも、まさかあなたもノエリーさんやフィオナさんと同じくバーツさんのお弟子さんだったとはビックリです」
「そうなんです！　バーツ先生は本当にすごい御方なんですよ！」
なんだか微妙に会話がかみ合っていないような気もするが、トラビスはニコニコと微笑みながら、熱弁するメイに耳を傾けている。まあ、微笑ましいといえばそうなんだけど。
その後、トラビスもエリカも夕食がまだとのことだったので、メイからの提案もあってうちでの食事に誘った。

もちろん、現状でも狭いうちに四人も入れないため、外にテーブルを出して食べることに。
さらに腕に覚えがあるというエリカも、料理に参加。
おかげで当初の予定よりも賑やかで楽しいディナーとなりそうだ。
料理が完成するまでの間、俺はトラビスから住宅事情を聞くことにした。
「もう王都に家を建てたんだって？」
「えぇ。王聖六将としてはまだ候補の段階ですが、本人がその気になっている場合はぜひ引き受けてほしいとの話だったので」
候補から外れるのは、本人が希望した場合のみってわけか。
まあ、もちろん例外もあるのだろうが、トラビスやニーナがここに拠点を置いているということは、少なくともこの二人は王聖六将入りが確定しているとして間違いなさそうだ。
そうしていろいろと話し込んでいるうちに料理が到着。
魔獣たちもお腹を空かせていたようで、メイの亡霊竜も一緒になって食卓はとても賑やかになった。
明日……いよいよ王聖六将の五人目と顔を合わせる。
果たしてどんな人物なのだろう。
今日は気になってなかなか寝つけそうにないな。

食事が終わると、トラビスとエリカは新居へと帰っていく。
「今日は夕食会にお招きいただき、ありがとうございました」
「こちらこそ、賑やかで楽しかったよ」
「では、明日またお城でお会いしましょう。おやすみなさい」
「おう。おやすみ」
トラビスとエリカはともに一礼をしてから帰路に就いた。
「さて、私たちも寝ましょうか」
「そうだな。――って、メイは魔法兵団の宿舎へ帰らないと。もうすぐ消灯時間になるぞ」
「きっとすでに門はしまっているでしょうから今日はこちらに――」
「帰りなさい」
さすがにこの狭い小屋に、年頃の娘さんを寝かせるわけにはいかない。
というわけで、メイは強制送還。
しかし……他の弟子と比べても、子どもの頃と中身が一番変わったのは、彼女かもしれないな。

立ち読みサンプル
はここまで

第二章　五人目の王聖六将

翌日。
城に向かうわけだが、城内にすべてのパートナー魔獣を連れていくのは困難だろう。
そう判断した俺は、連絡係であり有事の際は戦闘要員にもなれるクウタを小鳥形態にして肩へと乗せ、目的のセラノス城へ向けて出発した。
もちろん、何かあれば他の魔獣たちも召喚術ですぐに呼び寄せられるようにしてあるし、抜かりはない。
しかし……これで五人目か。
あと一人は到着が遅れているとのことらしいが、王聖六将の一員として加わること自体はもう決定済みのような流れだな。
昨日の食事の際は、トラビスには五人目の情報は言わないようにお願いしておいた。
予想する楽しみが減っちゃうからな。